

# 鈴木胤の国語学史上における評価の変遷について

趙 菁

## 一 本稿の目的

江戸後期の国学者、本居宣長の弟子である鈴木胤【すずきあきら】（1764～1837）は、日本語の活用、品詞、音声を体系的に捉えた先駆者の一人として知られている。胤は『活語断続譜』『言語四種論』げんぎよ『雅言音声考』おんじやう『離屋学訓』『雅語訳解』（以下は『断続譜』『四種論』『音声考』『学訓』『訳解』と略す）などの著書があり、いずれも後世の学者に与えた影響は大きい。

鈴木胤顕彰会から刊行された『鈴木胤』（1967年）という書に、時枝誠記が序を付し次のように言っている。

国語学者としての鈴木胤の業績については、明治の国語学者は、必ずしも正当に評価することが出来なかった。

その理由は、彼の著作が正しい姿において伝えられてゐなかつたことと、明治の国語学には、ヨーロッパの近代言語学の課題と方法とを基準にして、研究の価値を評価する、一種の裁断批評が行はれてゐたからである。

ここで時枝は明治以後の国語学ではヨーロッパの近代言語学を基準にして、その価値を評価する批評が行われていて、そのために胤の著書が正しい姿で伝えられていなかったという。

時枝誠記は「鈴木胤の国語学史上に於ける位置に就いて」（『国語と国文学』1927年1月）において、神宮文庫所蔵の『活語断続譜』を通して胤の活用研究の実態についての認識がそれまでの国語学史の上で誤りであったことを明ら

かにした。そして、腺を本居春庭の後ではなく、本居宣長から本居春庭への研究の流れの中に位置づけるべきことを論じた。

私は腺の著書活語断続譜を中心にして、宣長・成章・春庭・義門等の活用研究相互の関係を考察し、腺の従来考へられて居た位置を訂正して、その正に占むべき正当な位置を与へる積りである。  
(前出論文72頁)

このように、時枝によって腺は国語学史における正当な位置に置かれたと思われる。

時枝は腺を研究し、腺の言説を自分の言語理論の中心にすえている。山口明穂は時枝の論説について次のように語る。

『活語断続譜』が、正しい形で知られるようになるのは、時枝の伊勢神宮文庫所蔵の一本が紹介されてからであり、これがきっかけで鈴木腺を正当な位置に置いて考えられるようになったことを忘れてはならない。(山口明

穂「国語学史」『国語学の五十年』国語学会編 武蔵野書院1995年5月 281頁)

時枝の論説及び山口の指摘を見る限り、時枝以前の国語学史において、腺の学説は不当な位置におかれていたように思われる。確かに活用研究に対する評価においてはこのように言えるが、果たして腺の活用研究以外の点に関しても、従来の評価が正しいと言えるだろうか。このことを明らかにするために、本論文はまず、時枝以前の国語学史を通覧し、腺の学問に関する従来の評価を把握する。そして、時枝以後の国語学史をも合わせ、現在までの国語学史における腺の評価像を描き出したいと思う。

本論文は、国語学史に見る腺に対する評価を振り返る作業を通して、腺の学問をいかに捉えるべきか、腺の言説をいかによむべきかという問題を考えていく。これは今日における鈴木腺研究の姿勢そのものを問うことになる。

## 二 時枝誠記以前の評価

まず、はじめに時枝以前の国語学史において、鈴木<sup>注1</sup> 脰への言及・評価がどのようになされているかを見ておきたい。

1897年 上田万年『国語学史』（1897年講述 1974年2月出版）教育出版

1907年10月 福井久蔵『日本文法史』大日本図書

1907年12月 保科孝一『国語学史』早稲田大学図書

1908年9月 山田孝雄『日本文法論』宝文館

1908年10月 長連恒『日本語学史』博文館

1925年1月 吉沢義則『国語学史』日本文学社

1926年11月 橘文七『国語学史要』啓文社

1928年5月 伊藤慎吾『近世国語学史』立川書店

1929年2月 鬼澤福次郎『国語学史の研究』大同館

1897年に上田万年が講述した『国語学史』（1974年2月出版）は、日本における最初の『国語学史』といわれる。<sup>注1</sup> 鈴木<sup>注1</sup> 脰について、上田は「宣長ノ門人。漢学者ニシテ、又和学ヲ修ム」と語る。上田は脰を漢学者とし、その上に和学者として見ているのである。

そして、脰の著書に対して上田がまず注目したのは、脰の『学訓』であった。『学訓』は「国学の精神を十二分に体得した上で、広汎な漢学の体系の中に調和させたもの」（尾崎知光「鈴木脰伝」『日本語学者列伝』明治書院企画編集部

編 明治書院1997年 54頁)といわれる。脛は『学訓』においては、『論語』「述而・第七」による四教(「子以四教、文行忠信」)の形式を借りて、学問を「德行、言語、政事、文学」との四科に規定している(『大学参解・論語参解』鈴木脛学会 99頁)。この書の澤田居業の序文<sup>注2</sup>で語られたように、脛はこの四科をもって、学問を進める道しるべとしている。この書は脛の学問論であり、脛の学問の真髄を示した代表作(尾崎知光 前出著書 53頁)といわれている。

上田は、脛の学問に対する考えを理解するには、『学訓』は見るべきものであると評価し、さらに、『学訓』は他の学問書と異なり、その学問論が凡て系統を取り立てて論じるところに驚いたと述べる。上田は、脛の『学訓』のような漢学・国学を調和する視点で学問論を論じる業績も重視していることが伺える。しかし、『学訓』についての評価は、上田の以後の諸書には言及されていない。

その後、上田のように脛の漢学に関連する著書を論じるものはないが、脛の漢学の造詣について触れる書はいくつか見られる。まず、長連恒の『国語学史』をみると、

彼の著書の中には『論語参解』『四書雜纂』の如き儒学に関するもの半を占め、国学に関するものは多からずといへども、其研究の有益にして後世の国学界に資したること決して尠少にあらず。(同書243頁)

とあり、長連恒が脛の国学の業績を主に重視しているのが見てとれる。

そして、脛の国学の造詣が彼の漢籍の解釈を独特の説にしているとの説が見られる。吉沢義則は『国語学史』において、次のように述べている。

国学を研究して一家の見を立てては、漢籍を説くにも皇朝に参考して、特異な説を立てるので、愈々その声誉は高くなつた。(同書118頁)

また、伊藤慎吾の『近世国語学史』(93頁)にも吉沢と同じ説が見える。こうしてみると、脛の業績において、国学

の業績が主とされ、漢学の業績はあくまでも副として認められているようだ。これと相似する考えは保科孝一などの説にも伺える。

保科孝一は、「鈴木胤等わ、別にその本領があつたに関わらず、それに多少の支障おも受けずして国語上に立派な研究お貢献している」（『国語学史』186頁）といい、胤にとっては「本領」は漢学であるが、日本語に関する研究に成果が見られるとしている。また、橘文七の『国語学史要』においては、胤を春庭、義門と並べて、「自家の立場に拘はることなく、科学的に国語学を研究して、論理的に之を発表して、立派な国語学者としての位置を把持する」と述べている。このように胤の漢学の造詣は認められてはいるが、それを彼の語学の業績と並べて述べるまでには至らなかった。そして、胤の語学の業績については、『四種論』、『音声考』、『断続譜』の三著が語学史上で注目され、さらに、その中の『音声考』に見る学説が最も知られている。次に挙げる鬼澤福次郎の評価を見てわかる。

彼の著書には儒学に関するものが半ばを占めてゐるが、語学上有益なる著書も多い。『言語四種論』、『雅語音声考』、『活語断続譜』等は何れも語学史上注目すべきものであるが、殊に『雅語音声考』は所謂擬声的語源説を唱道したものとして有名である。（『国語学史の研究』329～330）

こうしてみると、諸学史では胤を主に国語学者として認めている。そしてその評価の中心は、胤の語学三著となっている。

ここでは、上に挙げる諸書を対象にし、「胤の三著がどのように評価されてきたか」ということについて、以下論じていくことにする。

## 1.

前掲の諸書において、<sup>注3</sup> 腺の著作の中で最も評価されているのが『音声考』である。まず、上田万年は腺の学説の中で独自性が最も表れているものとして、『音声考』を挙げている。

『雅語音声考』ハ、宣長ノ説ト全ク反対セリ。コレ実ニ面白キ現象ナリトイフベシ。師ノ説ニ反シテ、全ク自己ノ説ヲ吐キシナリ。(中略)而シテ、idealistic (観念論的) ナコトハ説カザレドモ、前ニ述べタルモノハ、文法史(研究) 上名誉アルコトナリ。(上田万年『国語学史』126～134頁)

ここで上田が言う「師ノ説」とは、宣長の『漢字三音考』を指す。宣長の『漢字三音考』は音声について述べたものである。この書では、外国の音声は禽獣の声に近いものとして退け、日本語の優越性を主張している。腺の『音声考』も音声について述べているのであるが、宣長のこの言説とは異なり、腺は言葉の起源を声を写すところのものと、その姿・形を写すものによって発生したといい、言語の意はすべてが音声の意ではないが、言語のまことの本は音声であるから、諸外国の言語とも互いに符合することがあると『音声考』にて述べている。上田は、腺は「師ノ説」とまったく異なる言説、すなわち「自己ノ説」を『音声考』において著した、と腺の独自性を評価し、さらに『音声考』を文法史上において名誉のある書としてその位置を定めている。

一方、保科孝一は、腺の『音声考』を日本語の起源説についての「一新研究」と称し、その内容には賛成できないものもあるが、ほとんどは真理であると『音声考』を評価している。そして、西洋の言語学者の中にも、この写声的起源説を唱道しているものが多くあるが、腺が十九世紀のはじめにおいて、西洋の言語学者が未だ写声起源説を唱える以前に、『音声考』を著し、写声的起源説の真理を説明したことは、「国語学史上においては大いに特筆すべきことと信ずる」

『国語学史』207～211頁）のであると述べている。このような評価はのちに多くの国語学史にも伺える。

さらに、保科は音義説の説明にも音声考を取り上げている。これは『音声考』を前から音義説の祖とする考えに対する批判と見られる。保科は音義派を数派に分類し、腺をその写声派に置いている。

鈴木腺の『雅語音声考』（中略）わ音義お基本として語源お解釈した他の学派とわ、大いに趣お異にしていることである。つまり、これわ音声お象って、言語お写したものがあるとゆーことお主として説いた言語の起源論であるが、その中に、少々音義説に類したところがあるから、これお一派に立てたのである。

（同書305～306頁）

これをみると、保科は腺を、音義上から言語の起源・語彙の意義・性質又は構造等を説明している音義派の学者と同様とは見なしていない。腺の『音声考』は、言語には音声をもって言語を写すものがあると説明したもので、音義説と類似したところがあるが、音義説ではない。保科は腺説と音義説の違いを明確にしようとしている。これによって、『音声考』の位置を高めようとしているのである。

『音声考』は他の書においても高い評価を得ている。

腺のこの著述は実に我が邦の語源研究上に一道の光明を與へたるものにして、徳川時代までの我が国語界の語源研究上の著書としては実は空前絶後の書とも称すべきものなり。（長連恒『日本語学史上巻』247頁）

また、吉沢義則は『国語学史』において、『音声考』が子供がどのように言語を学習するかの説明にもなると述べている。吉沢は、『音声考』は語源に関する研究としては異色なものであり、その中で腺のいう感情的叫声や自然的音声を模倣した音声が語根となって、種々の言語が発達したという擬声的起源説を、

小児が如何にして言語を学ぶかといふことも説明出来て、言語の起源に関する一部の真理を闡明したものと、

現今の言語学者に承認せられてゐるのであるが、これに関する有力な研究が我国に於いてもかく鈴木朧の手によつてなされたといふことは、偉とすべきことである。  
(同書118頁)

と評価している。

このような高い評価と比べると、橘文七の『国語学史要』に見られる評価はあまりにも平淡であるように思われる。橘は「第四章大石千引と鈴木朧の語源研究」で、『音声考』については「結局彼は言語の根源は音声であることを論じ、所謂、写声的起源を主張したのである」(66頁)のみと述べ、他の書に見る好意的評価を示さなかった。

以上みてきたように、明治期から時枝までの国語学史において、『音声考』は言語の起源に関する一部の真理を闡明したもので、国語学史上の名著であるという非常に高い評価が与えられている。<sup>注4</sup>

## 2.

『音声考』に続いて、『四種論』<sup>注5</sup>についての評価をみてみよう。

上田万年の『国語学史』は、前に挙げた『学訓』と『音声考』の他に『四種論』も高く評価している。

上田は、まず、朧を「systematical grammar (体系的文法)」を説く富士谷成章に継ぐ第二人者と称している。『四種論』の中に、特に形容詞、動詞の説明は「着眼ハ優レタリキ」と述べ、「日本語ガ agglutinativeproperty (膠着性ノ性質) ヲ有スルコトヲ、彼ハ悟レリ」(128頁)と朧の考えを称えている。

さらに、『四種論』にみられる「言語ノ根源」については次のように述べている。

言葉ノ終リニ根原ニ説キ及ボセリ。宣長ノ如ク、factヲfactトスルノミニアラズシテ、principle (原理) ヲ説ケ



リ。而シテ、動詞及ビ「てにをは」ノ出来タルコトヲ言ヘリ。

(130頁)

腺と師宣長説の方法論における相似性を示すことで、腺説の有効性を高めているように見える。また腺の学説の位置を西洋の語源説と繋げ、両者には同じような説が見られるが、腺説がはるかに先に主唱されたものであると述べ、さらにその評価を高めている。

之ハ、西洋ニ説ク origin of words (語の起源) ト同ジ。而シテ西洋人ハ、五十年以後ニ之ヲ説キタリシナリ。而シテ之ハ、 Sprachgeschichte (言語史) ノ中ニ入レザル可ラズ。(中略) カクノ如ク詞ノ筋道ヲ説クハ、在来ノ語学者ヨリ一歩進ミタリ。

(同書131頁)

『四種論』に見る言語の起源についての説は、『音声考』に見られる言説と通じるものである。保科などは、これについては『音声考』の評価に入れているが、上田は『四種論』の評価に入れている。評価する箇所が異なるが、腺の言語の起源説を高く評価している点においては同様である。

上田は、腺説はそれ以前の学者の説より一歩進んでおり、言語史に入れるべきものであると『四種論』の言語史的な意義を説いている。『学訓』については、上田と同様の評価は後の国語学史には見えないが、『四種論』については、上田と同じように高く評価されている。

その中に、『四種論』のみ注目する学史としては、花岡安見の『国語学研究史』が挙げられる。花岡は「活語」の項目において春庭と義門の著書の次に、腺の『四種論』を挙げている。そして、『四種論』は極めて簡略に解説した書であるが、その説は凡て要領を得ているので、初学者のために有益の書であると論じ、さらに次のように述べる。

契沖の正濫抄にせよ、本居の玉緒にせよ、春庭の八衢にせよ、義門の著書にせよ、卓見は卓見なれど、何れも其局部局部の研究にして、日本語法全体に渡りたる者にあらざりしが、鈴木四種論は稍全般に渡りての研究とい

ふべし。

(同書88～90頁)

花岡は、契沖、宣長、春庭、義門の研究はそれぞれ日本語の文法の一部について述べるものに過ぎないとし、それらと比すと、腺の『四種論』は日本語の文法の全体を見渡している点で、一歩進んでいるものとして認識している。つまり花岡は、日本語の文法体系を組織することにおいては、腺をその先駆者として位置づけているのである。

また、保科孝一の『国語学史』は、『四種論』を専ら品詞の分類について論じているものとして挙げている。品詞分類については契沖、富士谷成章の書でも論じられているが、初めて品詞を中心として論じたのは腺の『四種論』である。これについて、保科は次のように述べる。

もっとも品詞の分類についてわずでこれお論じた人がある。契沖の和字正濫抄にわ体用の語が見えているし、富士谷成章の脚結抄にわ名装挿頭脚結の四種に分類している。しかしながら、独立にこれお論じたのわこれがそもそも始めである。  
(283頁)

これを見ると、保科は、花岡が述べる日本語の文法の体系という大きなスケールからではなく、品詞分類という具体的な点から、『四種論』の位置を定めている。つまり、腺を初めて体系的に品詞分類を論じた学者として位置づけているのである。

また、山田孝雄は『日本文法論』(21頁)において、『四種論』は日本語の分類体系を立てる面においてすぐれた業績であると述べ、花岡と同じ視点から腺の四種論を評価している。成章の『あゆひ抄』が著されてから、腺の『四種論』が出るまでの四十五年の間には、日本語の品詞分類についての研究書がなかった、すなわち、腺を品詞分類の第一人者である成章に継ぐ人として山田は語る。また、宣長や春庭は、てにをは、活語について優れた業績を挙げていたが、そ

れは単なる部分的な研究であり、日本語の全体、即ち日本語の体系についての研究ではない。日本語の体系の研究といえば、腺の『四種論』を挙げるべきであると山田は『四種論』の評価を定めている。

ところで、これとは別に、山田は『四種論』の中に理解できないところがあると述べている。これは、腺が三種の詞と「てにをは」との区別をただ比喻をもって言っているために、その本義をよく捉えることができないということである。「てにをは」を詞につける「心の声」と述べられているが、この「心の声」とはどういうことか、思想を表す音声の義か、そうだとしたら、どの語もみな「心の声」ではないか。山田は、「てにをは」が詞につける「心の声」であるという解釈では納得できないとし、これは一種の「なぞ」に過ぎないと思う、と疑問を残している。後に時枝が、山田がいう「なぞ」というところについて、言語過程の点から解釈をつけた。

さて、保科の『国語学史』と同じ年に出版された福井久蔵の『日本文法史』には、花岡、保科、山田のような評価が見られない。

氏は文政七年言語四種論を公にし、体詞、作用詞、形状詞、てにをはの別を明らかにせり。(中略)有り及善し悪しを形状詞とせるは装図に基づきたるか。濁音をも一行に立てたるは進歩せる考なれど、ざ行を載せざるは未しといはざるべからず。

(97、98頁)

腺の「形状詞」は富士谷成章の「装図」に基づくものではないかと指摘し、また濁音における腺の分類には不足があると具体的に述べる福井は、文法史の流れにおける『四種論』の位置より、『四種論』の内容の是非を今日の文法概念に基づいて説いているように見える。

また、山田の『日本文法論』と同じ年に出版された『日本語学史上巻』において長連恒は、腺と宣長、春庭との比較ではなく、品詞分類における腺と成章の比較を重視している。また、江戸後期までは、日本語の全体についての研究は、

成章の『あゆひ抄』の次としては、『四種論』が挙げられるが、「恐らくは腺の此分類も成章の研究に待つたるものあらん。」(251頁)と『四種論』は成章の研究に劣るものとしている。

他に、腺説と成章説の関連について、吉沢義則の『国語学史』は腺の品詞研究は成章の影響を受けた所があるかもしれないが、分け方は必ずしも同じではない(123頁)と述べ、伊藤慎吾の『近世国語学史』は成章が精密に言語を分類したが、彼以後に於いては、腺が同じく企てていると述べる(333頁)。このように、腺の研究に成章の影響があるか否かについては明らかになっていない。そして、これは今尚、一つの疑問点として議論が続いている。<sup>注6</sup>

## 3.

『音声考』『四種論』は、立派な著書としてその位置が認められるが、『断続譜』<sup>注7</sup>については、時枝までの評価はかなり低かった。腺の『学訓』『四種論』『音声考』を高く評価している上田までも『断続譜』については、『活語断続譜』トイフ本アリテ、之ハ『御国詞活用抄』ヲ見テ知ルベシト云ヘリ(129頁)と書名をあげるのみである。

また、橘文七の『国語学史要』は「本期に於ける重なる著書」として、腺の『音声考』と『四種論』のみを挙げ、『断続譜』の書名さえ挙げていない。

一方、保科孝一の『国語学史』には『断続譜』について述べる文が見える。ところが、保科は、腺の『断続譜』は宣長の『御国詞活用抄』、春庭の『詞の八衢』、義門の『和語説略図』などを土台にして作ったものであるから、その成立も『和語説略図』刊行以後であると述べている(235頁)。

又、橘文七の『国語学史要』にも保科と同じような考えが伺える。

活語断続譜一卷は鈴木胤の活語研究を発表せる書で、彼は宣長の御国詞活用抄、春庭の詞の八衢、義門の和語説略図等を根拠として作ったもので（ある）。（84～85頁）

長連恒は『日本語学史上巻』で、『断続譜』については「然れども義門の研究に待ちたるものなることは確實なるべし。」（244頁）と述べ、胤の『断続譜』を義門の活用研究より劣ったものと見なしている。そして、山田は胤の説は成章説の継承であり、胤の用言に関する論考は精密さに欠け、八衢の優れた考えを知る以前に生まれたものであるとい、『断続譜』の業績を認めていない。

鈴木氏の説の基く所を見るに作用・形状の分類は富士谷氏の装を祖述したるものなり。その用言に特に精密なる研究をなし、はこれ時世の風潮にして、かの八衢全盛時代の倣がしらずしらずこゝにあらはれ来りしものにあらずや。

（『日本文法論』宝文館27頁）

しかし、これらの批判とは少々異なり、福井久蔵の『日本文法史』の「第一編 第三章動詞形容詞」には、「振分髪」の略評―活語断続譜―詞の八衢―四種の活用と変格―詞の通路（4頁）―という目次で示しているように、胤の『断続譜』を春庭の詞の八衢の前において言及している。そして、次のように述べている。

（活語断続譜は）こも不完全の点あれども、かく接続の状を明かにし、活用の状を詳にせむと試みしは次第に斯学の開けゆく一階段といふべし。但し各段に附したる名称は後人、義門の説によりて書き加へしをば其の儘出版せしが如し。その後、本居春庭は乃父の志を継ぎ、活詞の研究を纏めて、詞の八衢二巻を著したり。（88頁）

福井は「次第に斯学の開けゆく一階段」として、『断続譜』を評価し、また、『断続譜』に見る義門の説は後の人によって加えられたものではないかと考えている。福井のこの説は後に時枝に認められている。

『断続譜』がこのように非常に低い評価が下されるのは、ここまでの『断続譜』に対する評価が、柳園叢書所収の刊

本『断続譜』についてなされたものであるからなのである。この書には、『詞の八衢』及び『和語説略図』に用いられた名称が表の組織とは不調和な形で挿入されており、それを腹の説と誤認したことで、明治期の国語学者達は、腹の断続譜の活用研究は春庭の『詞の八衢』や義門の『和語説略図』の糟粕をなめたものとして評価しなかったのである。〔柳園叢書本を見ると、そこには春庭の八衢に用いられている名称（四段、一段、中二段等）、義門の和語説略図に用いられている名称（将然言、連用言、截断言）が使われているのが確認できる。〕

柳園叢書本のほかに『断続譜』はいくつの写本がある。神宮文庫に所蔵される写本がその一つである。この神宮文庫本は時枝によって発見される。時枝は、神宮文庫本の『断続譜』を発見することで、柳園叢書本は、後の人が春庭と義門の説によって書き加えたものであると明らかにした。そして、時枝は、『断続譜』の原著の面影は神宮文庫本にあると断じている。

### 三 時枝誠記の評価

#### 1.

1927年『国語と国文学』1月号に、時枝誠記の「鈴木腹の国語学史上に於ける位置に就いて」という論文が記載された。この論文において、時枝はそのときまであまり知られていなかった伊勢神宮文庫所蔵の写本活語断続譜を取り上げた。この論文の巻頭には、その目的が次のように述べられている。

私は此論文に於て、逆に、鈴木腹の活語断続譜こそ春庭の詞のやちまたに影響を與へたものであるとし、且つ、

断続譜は、宣長の詞の玉の緒、御国詞活用抄と、成章の装図とを結合して出来たものであり、鈴屋門下の鈴木眼は、事実上、本居語学と富士谷語学との統一者である事を論じ、鈴木眼に国語学史上の重要な位置を與へようとするのである。  
(60頁)

時枝が説くところによると、『断続譜』の神宮文庫本は、流布の版本(柳園叢書本)とは著しく異なり、八衢以後の学説の書入がなく、眼の原著若しくはそれに近いものであり、且つ中に訂正の個所もあり、『断続譜』の成立過程を知るためにも重要なものであると述べている。そして、八衢のような組織が成り立つためには、すべての活用形式を観察しなければならず、活用抄から、このように簡素化が行はれるのは飛躍がありすぎる。そこで八衢より三年ほど前に成立したと考えられる眼の断続譜を参照したのではないかという疑いが起こってくる。時枝は、岩崎文庫所蔵の御国詞活用抄の卷末にある眼の門弟高橋広道の跋文に、後の鈴屋の君(春庭)は活用抄と「先生」(眼)の断続譜とを一つにし、さらに詳説して『詞八衢』を作った、と記されているのを発見した(時枝誠記『国語学史』167頁、168頁)。

そして、時枝がそれが真実である証拠として、『御国詞活用抄』とこの『断続譜』を一緒にして春庭の八衢が成立したと語る。さらに、これによって眼の説が宣長と成章の研究を統一融合したものであることを述べる。時枝がこの眼の研究が春庭や義門の後塵を拝したものでなくて、むしろ春庭の詞の八衢を産み出す基になったことを説いている。

時枝の『活語断続譜』についてのこの新しい見解は、そのあと、『国語学史』(岩波講座日本文学1932)にも、「鈴木眼の両学派統一——活語の断続の研究」という題目をつけて述べられている。<sup>注8</sup>

宣長の呼応留り切れの研究、成章の接続の研究は、(中略)此の二の異なつた研究は、鈴屋門下の鈴木眼によって融合統一され、やがて春庭、義門への活用研究展開への道を開いた。  
(同書93頁)

そして、「私の(国語学研究(最終講義)——過去と将来——)」(『国語と国文学』1968年2月号、時枝誠記博士追悼

号)、『時枝文法』の成立とその源流―鈴木胤と伝統的言語観―(『講座日本語の文法第一巻』1968年1月)でも神宮文庫本の『断続譜』の発見について言及している。

時枝の発見によって、『断続譜』の神宮文庫本は初めて広く世に知られるようになった。時枝のそれに関する見解も後の学者の学説に多く取り入れられることとなった。時枝の発見は、活用研究における胤の位置を確かなものとしたのである。

## 2.

『断続譜』に関する時枝の発見につづいて、胤の『四種論』に見られる考え方が、時枝の言語思想に大きな啓発を与えたことについてみてみよう。時枝は『時枝文法』の成立とその源流(『講座日本語の文法』第一巻1986年明治書院)、そして、「心的過程としての言語本質論」(『文学』1937年6月、7月)において、胤の言説について次のように評価している。

私は今、自己の論理的結論から見ても、朗の説を正しとするのではなく、寧ろ、嘗て私が国語学史を調査して朗の学説を吟味した際、彼の到達した思想が、泰西の言語学説の未だ至り得なかった上に出ていることに驚嘆し、そこに啓発されて、ここに論理的に彼の説を組織することを試みたのである。

胤が『四種論』に語を区別して詞と辞とし、詞を「さし所あり」といい、辞を「心の声なり」と説く。三種の詞と「てにをは」との区別に使うこの比喻については、前述の通り山田が『日本文法論』において、てにをはを「心の声」と説くところが理解できないといい、これは一種の「なぞ」に過ぎないと思うと述べたのに対して、時枝は前出論文



「心的過程としての言語本質観」の中で、「心の声」とは概念内容の直接表現を意味すると論じた。さらに、時枝は腹のこの比喻から、鎌倉時代の藤原定家の作といわれる『手爾葉大概抄』の「詞如寺社手爾葉如莊嚴」という思想をも説明した。時枝は腹の思想を『手爾葉大概抄』以来の国語研究の歴史の流れの中でとらえなおして、『四種論』をすぐれた言語理論として評価した。

「詞」とテニヲハとの本質的な違いは、客体界の表現と主体の情意及び立場の直接的表現という表現性の相違にあると時枝は説いた（『国語学』147頁、188頁、『国語学原論』1941年231頁、『日本文法口語篇』1950年63頁等参照）。

時枝は、腹の考えを受け継いで、「客体的表現である詞」と「主体的表現である辞」との二分類をなして、これが伝統的な日本語の考え方であると主張した。そして、この詞辞論を基いて、時枝は独自の言語理論—言語過程説を提唱した（『国語学原論』1941年 岩波書店）。

### 3.

『断続譜』、『四種論』に比べると、『音声考』についての時枝の説明は多くはない。時枝の『国語学史』（111頁、112頁）の「音義言霊学派」の説明には、『音声考』が取り入れられている。その説かれるところを述べると、音義の観念が悉曇学に基づいたものであることは、既に仙覚の万葉集注釈に著しく示されている。近世に至っては、この説は、語法研究の大勢に押されて表面に現れなかったが、鈴木腹が言語起源説を雅語音声考に述べるに至って、再び学界の争点となったという。

そして、『音声考』の第四項に挙げる内容については、これは音の象徴を説いたものであるが、**腺**の根本觀念を見るならば音義説に基いていることが分かると述べている。又、平田篤胤はこの**腺**の説を更に敷衍しているとも述べている。前節に述べている『音声考』を優れた言説とする評価は、時枝の学説には見えず、『断続譜』と『四種論』を**腺**に対する評価の中心にすえているのである。

#### 四 時枝誠記以後の評価

次に、時枝以後の国語学史において、鈴木**腺**への言及・評価がどのようになされているかを見ておきたい。

- 1933年10月 田中健三『国語学史要』国語漢文学会
- 1934年12月 重松信弘『国語学史』明治書院
- 1948年5月 東條 操『国語学史』星野書店
- 1959年12月 田辺正男『国語学史』桜楓社
- 1970年5月 小島好治『国語学史』刀江書院
- 1972年11月 古田東朔・築島裕『国語学史』東京大学出版社
- 1976年1月 此島正年『国語学史概説』桜楓社

まず、これらの国語学史においては、**腺**は宣長の学問を受けて、特に語学方面に力を注いだ門人で、本領が他（漢学）に有りつつ、語学研究をもしたと評価されている。

胤はもと経学を主とし、後に国学に力を致し、宣長に入門したもの

（重松信弘『国語学史』72頁）

儒学国学を兼修し晩年明倫堂教授として儒学のほかに日本紀古今集を教えた（東條操『国語学史』105頁）

時枝以後の国語学史では、胤について、漢学が本領であるが、国学とくに語学は研究の中心となり、そして、やはりその語学三著が注目すべきものとして大いに論じられている。『離屋学訓』などの漢学著書についての評価は見当たらない。このように、時枝前後においては、胤は主として国語学者と認められている。

そして、胤の語学著書について、時枝以後の国語学史は、これらの書は、それほど大部のものではないが、いずれも胤の独創的見解が示されていると評価している（東條操の『国語学史』、古田東朔・築島裕『国語学史』）。その中に、「その学の特徴は着想見解の卓越せる点に存し、研究の精密さに於いては春庭・義門に一籌を輪してゐる」（重松信弘『国語学史』72頁）とする明治期の説の面影を少々残しているものもある。

# 1.

時枝の『断続譜』についての新しい見解は、後のほとんどの学説に取り入れられている。『断続譜』の成立過程については、春庭の『詞八衢』の良き礎となったという時枝説は定説となっている。

活語断続譜、春庭の「詞の八衢」成立の機縁を成した書である。（中略）かつては、胤は春庭の糟粕をなめたものとされていたが、時枝誠記博士が神宮文庫本を紹介し、その逆であることを明らかにした。

（古田東朔・築島裕『国語学史』266頁）

時枝などの研究により、この書（「詞の八衢」）の内容には後者（「活語断続譜」）が影響していることが明らかに

なった。

(此島正年『国語学史概説』60頁)

また、腺が宣長と成章の研究を統一融合したものであるとする時枝の考えも多く受け入れられている。

断続譜は御国詞活用抄を経とし装図を緯としたものというべきもので、本居学説と富士谷学説とを調和した点に大きな価値がある。

(東條操『国語学史』106頁)

宣長・成章の説を融合統一して、やがて春庭から義門へ展開していく活用研究の道を開いたもので、画期的名著である。

(三木幸信・福永静哉『国語学史』145頁)

ただし、その中に、田中健三の『国語学史要』(68頁)のように少々批判的に『断続譜』を見る説もある。『断続譜』を史的に見て必要な書であると認めているが、『四種論』や『音声考』に比べてずっと価値の劣ったものであるという田中の説は、やはり明治期の諸説の影響がまだあったのではないかと思う。

また、重松信弘『国語学史』(72～74頁)には、『断続譜』が成章の『あゆひ抄』と比較してみると合致しないところが多くあり、活用形そのものには成章の影響があるが、断続についての考えは宣長の『詞玉緒』を継承し発展したものであると述べ、腺のこの研究は宣長の『詞玉緒』の研究を発展整備したものと考え、そして、この研究にも『音声考』『四種論』に見られる粗雑さが存在し、次に春庭の手によって整頓されていると指摘し、やはり批判的に『断続譜』を見ているように思われる。

他に、田辺正男の『国語学史』(189頁)には、腺の『断続譜』に見られる、横の活用形については、進歩の跡が見られるが、縦の活用の種類については、宣長の『活用抄』の上にそれほど進んでいないと述べ、その組織化には、なお一段の研究を施すべき余地を残したが、『断続譜』という書を作った目的はほぼ達しているという。田辺は宣長と春庭との活用研究の繋ぎ合わせとして『断続譜』の役割を考えている。

## 2.

『四種論』については、優れた論説とする評価は時枝以前ほど見られない。腺の分類と成章の分類についての比較は従来の国語学史とほぼ同じように述べるが、四種論の内容に関する分析が多くなる。

重松信弘の『国語学史』(73頁)は、『四種論』には妥当ではない見解(例えば、用言の語尾をてにをはとすると、語幹のみ用言となる)が多く存在するが、専ら品詞分類を研究した初めての書とする点においては腺の業績を認めている。さらに、重松は四種論の所説に成章、宣長以外に、漢語との比較が多く見えるから、その方面からも示唆が得られるとし、腺説と漢語との関連を注目している。

また、東條操が『国語学史』(117頁)において、腺のいう「テニヲハ」は、成章の挿頭、脚結を含む、かなり範囲の広いものであるが、動詞、形容詞の語尾までを加えたのは失考であるなど『四種論』の内容について批判している。この『四種論』の「テニヲハ」に動詞・形容詞の活用語尾までも加えていることへの批判は三木幸信・福永静哉の『国語学史』(152頁)にも見える。

この他に、『四種論』より『断続譜』のほうが腺の研究の価値を高めるとの説もある。小島好治の『国語学史』(418頁)は、『四種論』は欠陥であり、論理的推考に成功していないものとしている。小島は、宣長と成章の二学系を統合した活用形の用法研究である『断続譜』が腺の価値を高めるものであると語る。『断続譜』をより重視しようとしているように見える。

これらと別に、腺の『四種論』と時枝学説との関連について述べるものは、古田東朔・築島裕『国語学史』と此島正年『国語学史概説』がある。古田東朔・築島裕『国語学史』は、『四種論』の成立、内容については具体的に述べ、腺

の「てにをは」は、「てには」秘伝書から宣長に至る「てにをは」観が受け継がれているもので、そして、のちに時枝は、この考えを重視し、「概念過程を含む」語としての「詞」と、「概念過程を含まない直接的表現」である語としての「辞」とを考えたと述べる。さらに、腺の以後の国学者は、大きい分類の仕方からいえば、成章の考えよりは、腺の考えのほうを受け継いでいる面があると『四種論』を評価する。

此島正年『国語学史概説』（67頁）には、腺説は後の時枝学説の基礎になることを述べ、さらに、腺の説は、単なる体系論ではなくて、音声考にも見られるように、言語の成立論にもかかわっていると述べるが、体系論に成立論が混ざるのはやや未熟で、そのため、「てにをは」の内容がこのような雑然としたものになってしまったのであるという、腺の「てにをは」に対する評価が低い。

『四種論』については、漢学との繋がりから論じる説もある。まず、古田東朔・築島裕『国語学史』には、前に述べた上田万年と同じように腺を漢学者とも称している。そして、腺の分類には、漢文漢学での分類に示唆を受けている点もあると述べる。これは、腺の「作用ノ詞・形状ノ詞」という扱い方には、荻生徂徠の漢文を「物名・作用・形状・助語」という分類法から影響を受けている点であると論じる。また、腺は漢文の「助語」と日本語の「てにをは」とは異なる点として述べる点については、日本語の優越性を説いているところは必ずしも首肯できないが、漢文漢語法のみによったというのではなく、『四種論』は日本語に対する省察が中心であったと漢文漢語法と比較する視点から『四種論』の内容を見ようとしている。

『四種論』と漢語との関連については、東條操の『国語学史』（114頁）などの国語学史は、『四種論』は漢学から得たものがあると語るが、その詳しいことについては触れていない。

## 3.

時枝以後の国語学史においては、『音声考』を、まず、この書は前人未発の卓見で、国語学史上特筆大書すべきものであり、国語学上忘れてならない名著の一つであり、西洋の言語学説にも通じる卓抜な論である、というような以前と変わらない高い評価が伺える（田中健三『国語学史要』143頁、田辺正男『国語学史』262頁、此島正年『国語学史概説』）

また、前に挙げた上田万年の考えと同じように、宣長説と反対する説が『音声考』にあると述べる説も三木幸信・福永静哉の『国語学史』に伺える。

そして、最もよく論じられるのは、『音声考』と音義説の関連についてである。その中に、重松信弘の説はやや批判的に見える。重松信弘は『音声考』に見る考えは卓識とするが、それぞれの事例に至っては牽強のものと指摘する。このような音義説に近いものがあるから、後の音義派が腹をその始とみることは必ずしも無理なことではないと『音声考』を批判する。

重松の説とは違って、『音声考』はよく音義説の祖とされるが、腹説にはそれと似ているものがあるが、必ずしも同じではない、また、音義説の芽生えは必ずしも腹に始まるものではないことがよく述べられる。（東條操『国語学史』119頁、田辺正男『国語学史』264頁）

古田東朔・築島裕の『国語学史』には、腹は音義説の学者たちとは違い、『音声考』で言語のすべてを律しようとしているわけではないと述べ、「ココロアル音声」と「ココロナキ音声」を認め、ともに「言語」になったのちには、それで「言語ノ意」が成立し、それがまた「音声」にうつると腹が考えていたと言及する。そして、此島正年の『国語学

史概説』には、腺の説がすぐれているのは、すべてを写声だけでかたづけようとするような偏狭さのないことであると『音声考』の意義を説いている。

以上みてきたように、音声考を音義説と区別しようとする考えを、これらの国語学史は明確に示そうとしている。そして、腺説に対する批判よりは、腺の音声考をいかに読むかとする方向に研究が変わっていくように見える。

## 五 鈴木腺をどう捉えるか

### 1.

鈴木腺に対する評価はその国語学の三著『言語四種論』『雅語音声考』『活語断続譜』を中心としている。（ここで便宜上、仮に時枝以前の評価を前期と称し、時枝以後の評価を後期と称す。）

上田万年は腺の『離屋学訓』について、全体において系統的に論じられていることに驚き、腺の学問に対する考えを理解するには、『学訓』は見るべきものであると述べているが、後の諸学史にはこれについて注目するものはない。

腺の三著では、従来一貫して評価が高いのは『雅語音声考』である。前期においては、「一新研究」、「真理」、語源研究上の「空前絶後の書」といい、さらに西洋に見るこれと似た語源研究よりはるかに早くもできたものであるなどのような評価である。これに比べてみると、後期になると、『音声考』については「前人未発の卓見」「国語学史上特筆大書」と前期と相似している評価が出ているが、音義説と関連する点から、『音声考』を批判する論が出てきて、さらに、音声考に見る腺の言葉を検討することで、音声考と音義説との違いを示す動向も伺える。時枝は『音声考』については特



別に意見を述べてはいない。

時枝の学説によって、大きく評価が変わったのは『活語断続譜』である。時枝誠記が断続譜の神宮文庫本を発見するまでは、断続譜についての評価は柳園叢書に収める断続譜を基づいて論じたものである。これを見るだけでは、春庭、義門の研究より劣ったもので、その価値を論じるまでには行かない。前期の評価はそのようであった。しかし、時枝は神宮文庫本の断続譜を発見し、断続譜の原著の面影はそこにあり、柳園叢書本は、後の人が春庭と義門の説によって書き加えたものであると、断続譜の成立を明確にした。時枝の発見は活用研究における腺の位置を確かなものにしたと言えよう。後期の断続譜の評価はそれによるものである。

『言語四種論』は、前期においては、日本語の品詞分類体系を立てる面においてはすぐれた業績とする評価がされている。ただし、後期には前期のように優れた論説とする評価が見られなくなり、『四種論』の内容に関する分析、批判が多くなる。また、『四種論』の所説に漢語との比較が見えるから、その方面からも示唆が得られると述べる説も多々ある。『四種論』は時枝の言語思想に大きな啓発を与え、時枝の独自の言語理論―言語過程説の基本となっている。とはいえ、『四種論』に対する評価が時枝説によって定まるとは言えない。ただし、腺のてにをはを「心ノ声」とする考えについては、山田孝雄は「一種の謎にすぎず」といい、時枝は「心の直接的な表現で、客体化、概念化の作用を含まぬ意味」として解釈した。時枝の解釈は「心ノ声」に対する考えの仕方の一つ示している。

以上、見てきたように、腺の学説についての評価は今尚統一されていないところもあれば、一貫しているところもある。確かに、時枝の伊勢神宮文庫所蔵の一本が紹介されてから、活用研究における腺の位置が定まったとは言える。しかし、「これがきっかけで鈴木腺を正当な位置に置いて考えられるようになったことを忘れてはならない」とする『国語学の五十年』の文を見ている限りは、時枝以前の国語学史において、腺の学説は不当な位置におかれており、そして

時枝説によって初めて腺の国語学史上における正当な位置が定まったのだと誤った認識を持つ読者もいるのではないだろうか。

本論文は、腺の学問に関する従来の評価を把握することを目的として、時枝前後の国語学史を通覧できたが、『国語学の五十年』の指摘は、活用研究に対する評価においては言えるが、腺の活用研究以外の点―品詞分類、音声に関する研究については誤解を導く説明になるとの危惧もある。腺の品詞分類、音声についての研究に対する従来の評価はほぼ一貫しているので、時枝の前の評価は腺の説を正しからざる位置に置いてはいないことが明らかになっている。

## 2.

鈴木腺のこの三著については、三著の関連を有機的に見ていくという従来の国語学史と異なる視点から指摘する論が尾崎知光によって展開された。

尾崎知光は著述の関係の中に腺の学説の展開過程を位置づけることが必要となると述べ、とくに従来、『断続譜』、『四種論』と別扱いにされてきた『音声考』との関連を見直すことによって、腺の学説に対する新たな解明をこころみた。すなわち、『断続譜』の「形状詞、作用詞」の分別から、『四種論』の詞の四種の分類へ、さらに『四種論』の「てにをは」と「詞」の別を「声」と「詞」として捉えることから、「声」から「詞」へと言語が形成されていく実態を明らかにすることで、『音声考』の研究へとたどりつく（『国語学史の基礎的研究』笠間叢書179 1983）という論説である。この論説は腺の言語学説の理解のために一つ新しい方向を示したと思われる。

## 3.

腺の語学の三著は、彼の三十代後半から四十代前半までの間に著されたものである。腺には、その前後には語学的な著書がなかった。語学著書の以外に、『源氏物語玉の小櫛補遺』『少女巻抄註』のような『源氏物語』に関する注釈書や『離屋学訓』『離屋集（初篇）』『大学参解』『論語参解』のような漢学的な著書を著している。しかし、腺が後世その名が残ったのは、国学者特に国語学者としての業績によってである。

上田万年の『離屋学訓』に対する評価、古田東朔の『国語学史』にみる『言語四種論』と荻生徂徠の言説とのつながり、さらに、最近、時枝の解釈とは別に「心ノ声」が漢籍に由来するとの山口明穂の指摘<sup>注9</sup>などを見ると、腺の学説と漢学との関連も注目されていることがわかる。

「国語学者としての腺」の他に、「漢学者としての腺」と言った名称もよく示されているように、腺についての研究は異なる視点から様々に、腺を評価している。腺の学問の一部としては、諸説は妥当で正確な説であると思われるが、腺を一人の学者として評価する際には、腺の学問に見られる多様性を総合的に把握する必要がある。

腺の学問の全体を見渡し、腺を評価するには、腺の語学研究、その根底にある漢学の面、またその展開としての文学的業績の面を含めるといふ視点が必要となろう。これは本研究の今後の課題としたい。三つの面の相互関係を考察することを通して、腺の特色を語学、漢学、文学の三つの面から総合的に捉えることが、これからの鈴木腺研究にあるべき姿勢となるのではないかと思う。

## 【注】

1. 古田東朔は序文で次のように述べている。  
「上田博士による『国語学史』の講義としては、本書に収めてあるものは3回目のものであるが、(中略)現在でいえば日本における最初の『国語学史』である」(同書1頁)
2. 『離屋学訓』の序文には次のように書かれている。「離屋鈴木先生、学博而識明、業勤而志篤、約天下之學術於四物、而論說精詳、以爲進学南針」(『鈴木服人と学問』所収 杉浦豊治 鈴木服学会5頁)
3. 『音声考』は、言語には音声を以って物事をかたどりうつすことが多いとして、その物事をかたどりうつした言語を四種(1鳥獸虫ノ声ヲウツセル言、2人ノ聲ヲウツセル言、3万物ノ聲ヲウツセル言、4萬ノ形・有様・意・シワザヲウツセル言)に分けて多くの例語を合わせて説明している書である。
4. これは、民族主義が高まっていた時代背景と関連があると考えられるが、速断を避け、今後の課題の一つとしたい。
5. 『四種論』は日本語を「体ノ詞」(名詞)・「形状ノ詞」(形容詞・形容動詞・ラ変)・「作用ノ詞」(動詞)・「テニヲハ」の四種に分類した書である。
6. 富士谷成章は服よりはやくから品詞の分類をし、その分類の中に助詞と助動詞を別に一類「脚結」として立てている。服の分類は成章の分類を継承したもののよう感じられるが、実は全く無関係に近いものであることが岡田稔(『鈴木服の言語分類意識と「言語四種論」の成立過程」(『鈴木服』所収)によって証明されている。
7. 『活語断統譜』は文法の図表といわれている(多屋頼俊「活語断統譜」『国語学大辞典』国語学会編 東京堂)。この書は本居宣長の『御国詞活用抄』を基礎にして、用言の切れ続きによる語形変化を整理したものである。
8. 時枝の単行本『国語学史』(岩波書店1940)にも述べられている。
9. 山口明穂は自らの論文「鈴木服のてにををは観」(『文莫』第22号1998年)、「鈴木服」(『解釈と鑑賞』2002年9月号)において、その由来を中国漢代の楊雄『法言』の「言心声也書心画也」(言は心声なり、書は心画なり)に求めて論じた。